

大社地方における文芸環境

——「まとる」を中心にして——

芦田耕一

出雲市大社町に代々手銭白三郎を襲名しておられる名家があり、現在のご当主は十一代目である。当家は出雲大社（主に国造家の千家家）との関わりが深く、江戸時代後期には千家家近習格の扱いをうける。当家には多くの書籍や古文書が所蔵されている。その中に「ちとせの舎御せうそこ」という書簡書きとめが存する。「ちとせの舎」とは七十八代国造千家尊孫（一七九六〜一八七三年）の男七十九代国造尊澄（一八一〇〜七八年）の書斎名で、「殿の常に書よみ物学などせさせたまふ所を千とせの舎とまうす」（『止由気乃御霊』付載「千歳舎御著述書目」とあり、尊澄の号ともなっている。

そのうち、次の二点に注目したい。

人のもとへ紫文消息をかりに遣しける時

けふは冬めかしう、かぜさえわたりてあられなど

のけしきもよほしがほなるは、春ともしらぬ心地せらるゝに、君にはたひらかにものし給ふよし、うれしと聞へさせむも世のつねになん。きのふはたいめたまはりて、おかしき御ものがたりうけ給はりしはいみじうなん。さてはとしのはじめの歌まどるものしはてたれば、少しはこゝろのどまるやうにはべれば、四季のせうそこぶみをかきはべらんとおもひたまうれば、君のもたまへるをしばしかしたまひてよかし。た、ん月にはおのがせうそこめきたるものを岩政のもとに遣してんとおもひ給ふるまゝとくくゝなむたのみ聞へはべる。さて此ころはち、君の外にものしたまへば、君にはことおほくものし給ふらむとはおもふものから、とみに聞へさするはいみじうなめしきことになん。

あて先が不明の書簡ではあるが、「紫文消息」の借用を申し出ている。『紫文消息』は橋本稻彦（一七八一〜一八〇九年）の著作（成立年時未詳。一八〇七年

の序がある)で、『源氏物語』から消息の部分のみを抜き出して巻の順に並べた雅文消息用模範文例集である。模範となる消息文を学習するために借用するのであり、書写するつもりもあつたかと思われる。尊澄の若年時ではないだろうか。来月に書簡を送るといふ「岩政」は岩政信比古(一七九〇〜一八五六年)のこと、周防国の庄屋で千家俊信(一七六四〜一八三一年)の私塾「梅廼(乃)舎」に学び、年は離れているが俊信を師とする尊澄とは同門であり、また尊澄の師でもある。これに続いてすぐ後に次の書簡がある。

文ことばのまとるをものせんとておなじ人のもとに遣しける

よべはこよなう風さえわたりしはげにさるることになん。今朝の雪につまどおしあけてみれば今はた冬のこと、ちしていみじくなん詠められける。はたいとよくはれたる朝日のかげに向ひあひたるけしき花どもみへておかしうなん。きのふは歌のまとるのはじめにて侍りしかば、おもしろき御ことのはどもをうけたまはりて、けふも猶くりかえしずしはべる。さてれいの文詞のまとるをものせむとおもひ給ふれば、けふあすのうちに御もとにまうではべらんとこ、ろざし侍れば、春のかすみのへだておはしまさで御かへりごとに御おむきのほどを書つらねたまひてよかし、万は御もとに参りて

とかきとめつ。こ□□(二字分虫損)きてけふちとせの舎にてもものせんとは思ひ給ふれどおはせんことのかたければ、かしこけれどおして御許にまうではべらんとはきこゆるになむ。

同じ人への書簡であり、寒い朝の初春の景が述べられ、「歌のまとる」が昨日行なわれたことなど前の書簡と通じるが、これは「文詞のまとる」を知友宅で催したいという内容である。その宅としたのは知友が「おはせんことのかたければ」であり、これは前文に「此ころはち、君の外にものしたまへば、君にはことおほくものし給ふらむ」と見えるように、知友の父が不在の故かとも思われる。

両書簡にある「まとる」を取り挙げよう。

『古今集』雑上に、

題知らず

よみ人知らず

思ふどちまとるせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける

とある。「まとる(円居)」はもともと多くの者が輪のように並ぶこと(車座)であるが、多くの者が一個所に集まり会すること、会合の意もある。

『源氏物語』玉鬘に、

をりふし、御前などの、わざとある歌よみの中にては、まとる離れぬ三文字ぞかし。

とある。帝の御前などで催行された歌の場での「まと

る」は欠かすことのできない大事なものだといふのである。

野村望東尼（一八〇六―一八七七年）の『向陵集』に、
十二月つごもりの夜にまとゐして百の歌よみけ
る中に鶯

夢さめていま鳴くこゑに鶯のものと初音をまこと
とぞ知る
とある。

二例は歌の「まとゐ」の好例である。同様に、両書簡の「としのはじめの歌まとゐ」「歌のまとゐのはじめ」と見えるのも歌会（歌合の可能性は無きにしもあらずであるが）で、ともに今回は歌会始であったという。月次の歌会が行なわれていたと推測される物謂いである。後の歌会は「おもしろき御ことのはともうけたまはりて、けふも猶くりかえしずしはべる」とあることから、尊澄にとつてきわめて有意義であつたらしい。

後の書簡に見える「文ことばのまとゐ」「文詞のまとゐ」の「文ことば（文詞）」は文章（ここでは和文をいふのであろう）の意で、「まとゐ」とあるので歌会のよりに文会、文章会が行なわれていたのである。文会を催行しながら和文の習作に努めるさまが窺える。

二

尊澄の著作に『松壺文集』という三卷三冊の和文集

がある。「松壺」は尊澄の号である。一卷は文久三年（一八六三）九月の西邸公群の跋文がある。跋者は未詳の人物である。二巻は慶応三年（一八六七）一月の源寿忠の跋文がある。跋者は日御碕神社官司佐々鶴城（一八三八―一九〇五年）で、尊澄を師と仰ぐ。三巻は慶応三年一二月の出雲大社権官司島重稔（一八四二―一九二二年）の跋文がある。一卷一冊と二、三巻二冊が別個に刷られ、明治二年（一八六九）の時点で三冊が上梓されていたとされる。出版元は名古屋の「萬卷堂」菱屋久八郎である。

本書は「このふみは、我松壺君の青柳のいと若くおはしまし、比より、折にふれ時につけてかきつめ給ひたる」文を「松壺の御館にさぶらひてえり出たるになむ」（一卷跋文）と記すように永年書き溜めた和文から選んだものである。知人の著作の序文、碑詞なども含む多彩な内容から成り、実話ではなく全くの創作もみられる。歌会や文会で習得したことが大いに役立ったであろうことは想像に難くない。

野雪といふを

ひと、せむさしの、冬のけしきをみるとてこと
ついでにもものしけり。さるはこの国にくだるべき
よしありて久しくとまるときのことになん。
ころは十一月なりければ雪のいみじう盛にて、は
ての玉山も雲るにうちつゞきたらんやうに大空よ

りつもりたるけしきなり。草はみな雪の下草にて
めざまし草のめざましくつもりたれば、

むさし野の冬のさかりを来てみれば雪もはてな
き所なりけり

猶いはまほしきことゞも、かぎりなければ雪のけ
しきにけたれてたゞかのひと雫をなん。(二巻)

一例を挙げたが、はたしてこれを実話とするか、創
作とするか判断に迷うところであるが(筆者は創作と
考えている)、こういう例が結構多く見受けられるの
である。

ところで、『松壺文集』に歌会や文会の記事が存す
るのであろうか。実は「まとゐ」の語が見えないもの
も含めるとこれに類する話が多くあり、書簡の件から
判断して多くは実話として扱つてもまず間違いないの
ではないかと思う。

草を

この頃何がしが我友のもとに来て歌ものがたりの
かうぜちのひまには歌のまとゐをなんものしける。

草といふ題にてその人、

少女子がかたちの小野のをみなえし草あはせに
はまづえらびてん

とうたひたるをある人おのがじしのおよぶべきに
はあらねどもとて、

わび人はわたらひ草をつみかねてうき世の露に
ぬるゝなりけり

とずしたるはいふかひなきえせ歌なりかし。され
どよまざらんよりはとれいのこゝろはやりせられ
てものしたりとつゝ、ましげにいへり。かくて人々
も何くれとよみいでたれど、みながらしるさんは
うるさくてらしい。(三巻)

尊澄の知友宅で「歌ものがたりのかうぜちのひま」
での歌会であるが、即題で「草」を「人々も何くれと
よみいで」と詠みあつたことが窺える。当日のメイン
である講説された「歌ものがたり」は次にみるように
かなり幅広く物語文学のジャンルをも含めての謂いか
と思われる。

秋の暮に人の許にてといふことを

みやびこのめるなにかしがもとにて、秋のなごり
をしむ歌よまんとてかれこれあひしれる人々もの
しけり。いづれもをかしうもあはれにもよみ出た
れど、こゝにしろさんはとかきもらしつ。されど
ありしことゞもはかつがついはんとす。たゞに歌
のみにて秋のわかれを、しまんはかひあらじとて
何がしは竹取物語、くれがしは大和ものがたりを
ときてよと、おのがじしくさぐさの物語ふみをと
うでてももの、あはれをいひしらひけるは、みやび

かなるまどゝなりきかし。

(二卷)

風流な知友宅での集いであるが、前例と違って、歌会がメインとなつてゐる。即題か宿題かは判然としな
い。多くの秀歌が詠まれ、その後、各自が得意とする
『竹取物語』『大和物語』などの講説があつたという。
『松壺文集』にはこれら以外にも、『源氏物語』『伊勢
物語』『狭衣物語』『樽の中納言物語』『松かげの物語』
など未詳の物語も含めて多く言及されておられ、他に
『枕草子』もみられ、尊澄がこのような場でこれらを
学ぶ機会がしばしばあつたと思量される。

寄雨恋のこゝろを

けふの歌のまどゝは寄雨恋といふ題なるを文こと
ばにもものせよかしと人のそゝのかせば、いさゝ
かおもふことゝもをいはんとす。さるはいつばか
りのことなりけん、いとむつまじくかたらひたる
人ありけり。こよひとはんといひつかはしたるに、
ゆふつかたより雨いみじうふりいでければ、心の
うき雲のうきたつやうなれどせんすべなければ、
くるしくもさはりの雨のふる夜かなあふせは佐
野のわたりならねど

とひそかにいふをかたへの人や紙のはしにしるし
てかのもとにおくりけん、かへしとでもてこしを
みれば、

こぬゆゑにまちこひわびてふる雨をわがなみだ
ともしらぬ君かな

いとく恋しうなんとあり。いかゞはたゞにあら
ん。
(二卷)

歌会がメインで、結題の宿題であつた。その当日に
尊澄は和文の制作を依頼されたのである。「文ことば
にもものせよ」とあるので歌も含めてかとも思われる
が判然としない。和文はいわば付け足しで、尊澄は
個人的に頼まれたような感じを行間から受けるのであ
るが、いかがであらうか。その和文は「さるはいつば
かり・・・いかゞはたゞにあらん」である。尊澄は歌
にも秀でており、『松壺歌集』なる書があるとされて
いるが、伝わつてはいないのでその全容を窺い知るこ
とができない。しかし当時の華やかなりし類題和歌集
に実に多く入集しており、全国的にも名の知れた一流
の歌人であつたことが分かる。ただ尊澄は後述するよ
うに和文の評判もすこぶる高かつたことは確実である。
次に、歌会や文会とは明記されない「まどゝ」を挙
げよう。

雪を

雪見のまどゝをせんとして、むつまじきかぎりうち
つどひて盃めぐらしつ、白雪のふるきよのもの
たりして、ちりかふゆきのをかしきにも、何の物

語にはかゝる折にはしかぞあるとさまことなる雪のあげつらひして、源氏物語にこそめづらかなることもあれ、世の中のありさまはこのものがたりにいひつくしたるを、朝顔の姫君の雪をみたまひて源氏の君とものがたりしたまひたるはいかにをかしきけはひなりけんかといふに、雪のひかりいとゞてりそひて松にかゝれるいひしらずおもしろし。(二巻)

知友との雪見会という趣であるが、やはり文学のこゝろが話題になり、多くの物語を俎上に載せるが、最終的には『源氏物語』を賞賛して朝顔の姫君に行き着く。これは光源氏が朝顔邸に行き求婚する場面であるが、その景は「月さし出でて、薄らかに積れる雪の光りありて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり」(朝顔)と描写されている。『源氏物語』は『松壺文集』に一五箇所に取り挙げられている。

鶺鴒といふ題にて

鶺鴒かひといふことはいとふるくよりあることなりけん。檀原の帝の御歌にもよませ給ひ、後のものには源氏の物がたり藤の裏葉の巻にも、ひむがしの池に舟どもうけて、みづし所のうかひのをさ院のうかひをめしならべてといへるにてしられたり。猶あがりたる世のふみにこゝら見ゆめり。この頃

友だちの家のまとゝに鶺鴒といふ題にて、みな人ふみかけばおのれにもものせよとて、ふりはへて何がしよりせうそこしていひおこせしを、なにごとにもこゝろおそき身なれば、いかにせんとおもひめぐらせどもさらにおもひうることのなきにその日にもなりにけり。いづらつくらせ給へるか又せうそこしてけるに、さはおもへどせんすべなくて上のくだりのことゞもをかきてとらせたるは心にもあらずながらいかゞはせむ。(二巻)

知友宅での文会の話であるが、会そのものの様子は述べられておらず、尊澄が参加したかどうかもはつきりしない。「鶺鴒」という題で和文の制作を依頼されたのであるが、督促されてようやくのこと「鶺鴒かひといふことは……こゝら見ゆめり」をものしたといふ。

「檀原の帝」は神武天皇のこと、『古事記』中に、

楯並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行きま
もらひ 戦へば 吾はや飢ぬ 鳥つ鳥 鶺鴒うかひが伴
今助けに来ぬ

と見える。

そして『源氏物語』藤裏葉に、冷泉帝が朱雀院とともに六条院に行幸した折のこと、

東の池に舟ども浮けて、御厨子所の鶺鴒の長、院の鶺鴒を召し並べて、鶺鴒をおろさせたまへり。小

さき鮎ども食ひたり。

とある。

次に、「まとゐ」が行なわれたとは明記されていないが、その可能性が考えられる事例を挙げてみよう。

夏草のこゝろ

夏草を題にてこれかれ歌よむに、おのれはふみ詞こそをかしからめとてものせんとす。そは紫のあや詞とか何とかいふふみのはしがきに、つねに歌はよむとおもへる人のあや詞をもさらぬも文といふものかゝざるなんいとくちをしかるべき、といへるごとく歌のみよみてはことゆかぬふしもあればおもひおこせるなりけり。夏草といふものは処せげにしげりて五月雨の頃はわきていぶせくなん。されど秋になりては千年も、草と花のいろくゝをかしようめづらしうも咲いでたるは、またたぐふべきものなくいみじうおもしろし。また片岡にあらまたしげりたるはたがしめおきて秋を待にかあらん。大宮人たちの草合にえりとらるゝもあらばいとほいかなへる草ならんかし。(三卷)

他の人が歌を詠むのに尊澄が和文を制作したというのは「寄雨恋のこゝろを」と同じであり、また前話「鶉川といふ題にて」のようにこれは「まとゐ」のた

めであったことはあながち否定できないのではないか。「紫のあや詞」という著作は未詳であるが、この端書を論拠に歌人も和文を学ぶ必要があると主張し、「夏草といふものは・・・草ならんかし」と自作を披露するのである。

余寒のこと葉

ある人のきていふやう、君には文詞三百とかものしたまはんの御心がまへ何がしがもとにてうけたまはり侍りぬ。いかばかりかつくり玉ふらんととへるに、よひくゝ人みなしづまり侍りて子の時ばかりにつゞり侍れば、世にしられじとしのび侍りしにいつのまにかもれ侍りけんといらふれば、此頃余寒といふことを題にて人々に歌あるはふみ詞から歌などぞ、のかし侍るをいかでものし玉ひてよといふに、ほのぼのおもひえしことをつゞけんとす。空はなほとうたひしはげにさるることにて雪げにくもる月かげのさまみる心ちしていみじうなん。かた岡の春のけしきいかならんとおもひやられて友とする人ひとりふたりして行けり。げに霞もやらず朝ぐもりしたるに、松のさ枝よりしづくのかつがつかおちくるに、日かげも寒く袖ひゆる心地すをよそなるとはかゝるをいふらんと筆のはしるまにくゝれいのたゞ言のやうにかきて、かの人のもとにつかはしたるを、をかしとめでたりとい

ひしときくもまたをかし。

(三卷)

尊澄がいま熱心に取り組んでいる和文の制作を某人から依頼されたのであるが、「空はなほ・・・きくもまたをかし」がそれである。この時は和文以外に歌と「から歌」(漢詩)が作られるという。はたしてこの三ジャンルの作品をどう扱おうとするのか。よみ捨てにされることはなかったであろう。想像を逞しくすれば、三ジャンル全てではないにしても「まとゑ」的な場が設けられ、披講されたのではないだろうか。

三

叙上のように、「まとゑ」を取り挙げて文芸集団の存在を論じてきたが、尊澄を取り巻く環境を！今までと内容的に重なる部分もあるが—もう少し説明してみよう。

樽の中納言物語

何がしのもとにていとなれくしう歌ものがたりするに、その人いひつるは隆国大納言の宇治にて人々のことぐさをかきとめられしをまねぶにはあらねど、き、おきしことのありとて、昔いつばかりの事なりけん樽の中納言といふ人いまそがりけり。かの木をいみじうめでさせたまひて家のめぐ

りにあまた植てめでたまひけるに、花の頃は紫のうてなどのみ見わたされけり。こゝには北の方をすませたまひて、よなくかよひたまひけり。しのびて花の盛なるに入来まして、

ゆかしくも妹が垣根に咲にけりたれにあふちの花にかあるらん

など口ずさびたまひていみじうかたらひたまひけり。かゝるゆゑをもて樽の中納言とはいひつたへたりとなん。

(三卷)

知友宅での歌物語をめぐる話であるが、会席者がどれだけかは分からない。「隆国大納言・・・かきとめられし」というのは散逸した説話集の『宇治大納言物語』をさす。ひそみに倣って知人が伝聞した話を披露したのであるが、実際は知友の創作であったとも考えられる。因みに、『樽の中納言物語』という作品は知られていない。

夏夜のこゝろを

まだよひながらといふ古歌めづらしからねど、例のおもひいでたるにうたものがりせばやとて侍従君きたまへり。なく一声に明ゆく空ながらをかしきさうしやさぶらはんとてふりはへてものし侍り。この頃何がしのもとにめぐらかなるさうしこそえて侍れ。松かげの物語とて、松かげの中納言とい

ふ人の姫君夏をいみじうこのみたまふほんじやうに、よひくにはほと、ぎすを待たまふことなん世人にはまされりける。雲のいづくに月やどるらんとおもふまで、明はて、も猶空のみうち守りおはしましけり。か、れば夏のよの姫君となんいひけるとのたまふにほのほのしらみゆく空のけしきいひしらずをかし。(三卷)

同様に歌物語に関する記事である。「まだよひながらといふ古歌」を想起した折も折、同好の士侍従君が尊澄を訪問して最近入手した『松かげの物語』の話をしたという。「侍従君」は不明の人物である。古歌は「百人一首」にもある著名な「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月やどるらむ」(清原深養父作)である。『松かげの物語』については、名前の酷似する作品に南朝の宗良親王(二三一―没年未詳)の周辺で作られたとされている『松陰中納言』があるが、「夏のよの姫君」は見られず、該当する話もない。「なく一声に明ゆく空」は『古今集』夏の「寛平御時后宮歌合の歌」とある紀貫之作の「夏の夜の臥すかすれば時鳥鳴く一声に明くるしのめ」を踏まえた表現である。

「侍従」がそもそも天皇に近侍する職であると思しいので実話とするにはやや躊躇せざるをえず、話自体がまったくの創作という可能性が高いが、いま参考ま

でに挙げておく。

述懐のこゝろを

(前略) かくていとなつかしく明くれ歌物語のかたきにして、心やりし何がしがもとに、名残をしまがてらものせんとて夜ふかういづるに、有明の月いとをかしう花の木どもやうくさかり過て、はつかなる木陰のいとおもしろき庭にうすく霧わたりたる、そこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれにおほくたちまされり。道すがらのけしきあまりかなしくてみもやらず。からうじてかの人のもとにもものしたり。あるじはすみのまのかうらんにおしか、りてこゝろにく、月うちながめてぞあたりける。(後略) (二卷)

歌物語の内容の件ではないが、「歌物語のかたきにして心やりし何がし」とあるように歌物語を語り合う同好の士についてである。風流人も秋の夜の名残を惜しんで月を眺めていたという。きっとその行動を予期して尊澄は訪問したのであろう。

最後に、歌物語とは関わらないが、数寄人の話を挙げよう。

萩を

このさとに中臣の何がして、みやびこのめるを
のこあり。それがもとにゆふつかた行けるに、萩
のいとをかしきを庭にうゑて心やれるなりけり。

わがやどの真萩花ちるゆふぐれにしかの音ちか
くなりまさるなり

といふ声いとをかしくきこえたり。あるじはいへ
にこそありけれ、よきをりにとて例のものがたり
して、かのちりかふ枝をかざして君ならずしてと
あるじのいへるは、梅ならねどをりにあひてはを
かしきものからあはれになん。(二巻)

尊澄が秋の夕方に訪問した話である。その相手の
「中臣の何がし」は中臣正蔭(二八〇二〜六三年)、通
称典膳のこと、出雲大社権禰宜であり、俊信と尊孫を
師とし、和歌・俳諧・狂歌・書など三六芸に通じる才
人として著名である。尊澄より八歳年長である。時機
を逸することなく歌を誦しているところに尊澄は行き
合わせというより前話と同様に正蔭の行動を予期し
て出かけたのであろう。風流人同士は意気投合した
のである。その時に正蔭は「君ならずして」と萩の散
り交う枝を挿頭すのであり、尊澄は梅花ではないが、
折にふさわしいと賞賛するのである。「君ならずして」
は『古今集』春上の「梅の花を折りて人に贈りける」
とある紀友則作の「君ならで誰にか見せむ梅の花色を
も香をも知る人ぞ知る」の初句である(歌詞は少し違

うが)。あなた以外に梅花の色と香のすばらしさを分
かる人はいないというのが歌意で、ここでは、この情
趣を解するのは尊澄しかないのと持ち上げているので
ある。

四

以上、「まとゐ」を中心に、大社地方の文芸環境を
みてきたが、和歌や和文さらには漢詩の制作、歌物語
の講説など多岐にわたって文芸活動が盛んに行なわれ
ていたことが明らかになり、そしてこれらを生み出す
基盤となる風流人士の交流を窺うこともできた。また、

秋田を題にて

九月十日ばかり何がしのもとに都より識者ちひひの来居
てふみよむをきかむとてもものしたる。(後略)

(一巻)

というように聴講に行くなどして研鑽に努めたことも
ある。狭い地域でこれだけの文芸的営為がなされたこ
とは瞠目に値する。やはり出雲大社の存在が大きい
であろう。

ここで、尊澄の父尊孫が主宰者であると思しい「鶴
山社中」が存在したことに注目したい。「社中」は地
域を中心とした同門の集まりをいい、これは千家国造

館の裏山「鶴山」に因む命名で、歌人結社である。天保年間（一八三〇～四四年）の初期にでも結ばれたらしく、明治時代（一八六八年～）初めころまで活動していたとされている。

実は北島国造館の裏山「亀山」に因む「亀山社中」も併存しているのである。尊孫の歌集『自点真璞集』に、

両社中の男どもつどひて山松といふ題をよみける日

鶴かめと名をわく山も松風の千代よぶ声はへだてざりけり

とある。「両社中」「鶴かめ」と見えることからすれば、亀山社中も結ばれていたことは間違いない。想像するに、七十四代国造北島從孝（一七七四～一八三八年）か、歌人としても著名な七十五代国造北島全孝（一八〇三～八六年）が主宰したのであろう。

両社中の交流は他の資料に拠っても分かる。出雲市立大社図書館に「両社中内会兼当和歌控」と外題のある歌会の記録が所蔵されている。両社中合同で安政五年（一八五八）五月一三日に催行された内輪の会（内会）であり、主宰者は「会頭」とする加藤昌寿であろうが、昌寿は作者表記に「十二才」と記されており、やや不審はある。

本歌会の形式を簡単に説明すると、「仲夏」という兼題で三九首、当座で四八首の計八七首から成る。当

座には、「当座探題」および歌題「寄海恋」での「当座通題」があり、前者は三三首、後者は一五首詠まれている。「兼当和歌」は兼題と当座の意味である。詠者は四四名（うち女性一名）で千家尊孫、北島全孝の両国造をはじめとする両社家の人々であり、その多くが他の歌集にも入集する著名な歌人たちである。

この両社中の盛んな活動を無視して、特に「歌のま」とる、さらに「まとゐ」全般を考えることはできないであろう。

〔注〕

表記は原本通りに翻刻することを基本とした。ただし、繰り返し記号は現行の文字に改めた箇所が一部ある。句読点、濁点を付した。また漢字は原則として新字体を用いた。

〔参考文献〕

中澤伸弘『徳川時代後期出雲歌壇と國學』

（錦正社）

芦田耕一『出雲歌壇』覚書（私家版）

芦田耕一『江戸時代の出雲歌壇』（今井出版）

貴重な資料を提供していただいた手銭白三郎、裕子さんご夫妻、いろいろとご配慮いただいた手銭記念館学芸員の佐々木杏里さんにお礼申し上げます。

本稿は、国文学研究資料館基幹研究「近世における
蔵書形成と文芸享受」(二〇一一―二〇一三年度)の
研究成果の一部である。

(本学名誉教授)